



# ひらひらだより

No.8 2018.11.30

木々の葉が落ち、足元までお日さまの光が届くようになってきました。

空の青みが増し、迫り来る冬を感じつつありますが、夜空にきらめく星々を眺めると、やはり冬も楽しみになります。

秋から冬に季節かわる今時分になると、森の生き物たちに思いを寄せられるようになります。厳しい冬に向けて、しっかりと備えることができていますか？と気になります。昨年は、海賊湖の前にもたくさんドングリが落ちていましたが、今年は子どもたちとお散歩に出かけてもドングリは少なくなりました。昨年の豊作に反して、今年は不作。木の実の量は年によって違うので、豊作と不作を1年おきにくり返すことで、生きものの命が保たれ、木々も子孫を残せるようになるに言われています。絵本『どんぐりかいぎ』（このやぶの文/片山健 絵）の中で、「どうぶつたちが増えすぎて、木の实が全部食べつくされてしまう」と、木々が相談する様子が描かれています。単に井沢の森でも、もしかすると毎年重要な会議が行われているのかもしれない。何気なく見ている木の实ですが、そこには自然世界のドラマが隠されていて、生きもの同士の攻防が繰り広げられながら、バランスが保たれているのです。ツキノワグマの冬眠まであと少し。「今年の森はどうですか」と聞いてみてください。

さて、ひらひらとお散歩に出かける時、森の中で過ごす時、その時見えている森の様子をできる限り言葉にするように心がけています。「葉っぱの色が黄色になってね」「草が枯れてね」「この草の实、食べられるね」「だれかが食べたね」「虫がかかるとね」など。周りにいる子どもたちは、興味を持ってのぞきにくることもあれば、聞いていないような、いやなような時もある。「何が楽しいの？」「どうして嬉しそうにしているの？」と不思議そうに見ていることもあります。でも、

私がいつも楽しそうに探し、言葉にして表現していると、本機会を重なるうちに、周りのものに気づくようになって、「こんなものは見つけたよ！」「これは何？」と見せてくれたり、教えてくれるようになります。最初は「どんぐりしか見えていない世界が、探る視点を切り替えることで、次々と気付けるようになってくるのです。自分で見つけられると、探偵になったかのように楽しいものです。

先日、まっほくりの菜子ちゃんと運花ちゃんと、落ちている木と土から生えている赤ちゃんの木(幼木)の違いを観察しました。木の長さもついている葉っぱの数も同じくらい。でも、幼木には小さな根っこがたくさんありました。同じに見えるけれど違う。「赤ちゃんの木は、土から出ると水がためたよね」と菜子ちゃんが気付いて、そと土に戻してあげていました。森の中に空回りこんで、じっと観察したからこそ、自分で気づいたのだからと思います。何かに出逢い向き合う時間を、こまめに大切に過ごすことができるのも、ひらひらならではですね。

幼少期の早い段階から、子どもは科学者と同じ思考をしているそうです。実際に経験したことを基礎として、観察、仮説検証し、日々自らを巻き込んで世界から学んでいます。小さな子どもたちが、実際に虫に触れ、感じ、その変化を見続けられる世界。それには子どもたちの成長と同じように、ゆっくりと季節が変わる自然の世界が一番適しているのだと思います。

ひらひらの小さな科学者たちは、これから冬の森でどんな不思議に出会えるのでしょうか。ひらひらで不思議にあふれ、好奇心を満たしてくれる場所は、ふいに思いますが、この冬はじっくり観察したり、調べてみてください。一緒に探る下げてみてください。ふと湧いては消えていく子どもたちの興味。どんな風に発展していくのか楽しみです。

井守 祐子